



兎澤さんのリンゴ畑の前に広がる山。

「リンゴづくりをやめようと思って山に入りました。私にとってリンゴをやめるということは、死ぬということなので、そういうつもりで山に入ったんです。でも、そこで子連れの熊に会ったんです。距離は3mほどでしょうか。子連れの熊が危ないことは知っていたので、恐怖で硬直しました。熊は何度もこちらを振り返りながら、ゆっくりと立ち去っていきました。その姿が見えなくなるまで見送ると、涙が流れてきました。私、泣いてました。変ですよ、死ぬつもりで山に来たのに、いざ死目前にすると死ぬのが怖かった。その晩は、一人でわんわん泣きました。」

鹿角市では明治9年からリンゴ栽培が始まった。八幡平山系に抱かれた盆地のおかげで、秋の寒暖差が大きく、昔から品質の良いリンゴができる有名な産地だ。一面に広がるリンゴ畑を囲むように連なる集落の端には、「リンゴ復興の父」兎澤徳蔵」という石碑が建っている。徳蔵氏は兎澤さんの五代前の先祖に当たる。鹿角リンゴの発展に大きな貢献をした人物だった。兎澤さんの祖父母はリンゴ農家で、両親は農業を継いでいなかった。彼は兎澤家の長男として生まれた。幼いころの遊び場はリンゴ畑で、秋になると収穫の手伝いをした。一カゴ収穫すると5円のお駄賃がもらえるので頑張った。



1.リンゴを頼張り、史上最高の出来にご満悦の兎澤さん。2.ずっしりとしたリンゴに枝が大きく垂れ下がる。
3.集落の神社にたたずむ兎澤徳蔵氏の石碑。

母は、早朝から畑に出て、仕事から帰ると日暮れまで畑で働いており、楽しみといえば孫の大会を見に行くことぐらいだった。彼はそんなふたりの喜ぶ顔が見たくて練習に没頭した。練習コースはリンゴ畑の周りだったが、外を走ればいつも誰かが農業を撒いており、農業が身体にかかることもあった。「農業を1秒吸ったら1秒タイムが落ちると思っていたので、農業が本当に嫌でした」。そんな思い込みもあり、リンゴといえば農業のイメージが強く、農家にはなりたくなかった。

大学進学とともに実家を離れると、一人暮らしのアパートにリンゴとリンゴジュースの仕送りが届いた。一人では食べきれないので周囲にお裾分けをすると、みんな「おいしい、おいしい」と喜んでくれた。一日で1ℓのジュースを飲み干してしまう友人もいた。卒業後、三重県の実業団で4年間を過ごしたある日、祖父に癌が発覚した。「じいちゃんが死んでしまっ